

---

**真・恋姫†無双 ～天より智を授けられし者～**

H L

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双 ～天より智を授けられし者～

### 【Nコード】

N0293X

### 【作者名】

H L

### 【あらすじ】

真・恋姫十無双の世界に黄月英として生まれた男が主人公の物語です。

因みにこの小説は作者の妄想及び夢やら希望やらが多分に含まれますので、お読みになる方は毒されないようお気をつけください。

と言うことで、オリ主オリキャラが許せない方、及び作者の妄想駄文に付き合っていられない方は、お手元の『戻る』またはBAC

KSPACEキー等を押しこの作品から一刻も早く退避してください。

因みに桃園組が好きの方は桃園組の扱いの悪さに不快な思いをされる可能性があるので、この小説を読むことをオススメ出来ません。

## 第一回・オリキャラ紹介（前書き）

と言うことでオリキャラ紹介です。

今回紹介するのは、主人公の月英とその軍師、徐庶の二人です。

ネタバレ的なモノは含まれてませんし、読み飛ばしても構わない事がほとんどですので、読む読まないは読者様の自由です。

## 第一回・オリキャラ紹介

能力直は統率、武力、知力、政治、魅力の5つを1〜6の6段階で表します。因みに6は呂布の武力や劉備の魅力等のチートクラスです。

黄月英 真名・夕

統率 4 武力 5 知力 6 政治 5 魅力 4

この小説での主人公、性別は何故か男。

武器は自作の改造弩で…名前はまだ無い。

性格は面倒臭がりで少し優柔不断…顔は本人曰く程々、世間では不細工と噂されているが…実物は噂と違い10人中8人が振り向く位には美形。

前世は日本人で高校、大学は工業系の学校に進学し、製造業に就職。  
24歳の時に仕事の帰りに心臓発作で倒れ、そのまま死亡…。

気の扱いに長けているので、一騎討ち等の時には氣を手や足、矢に纏わせ、相手に流れる氣の流れを読んで戦う。呂布とも10分程なら戦闘が可能。

徐庶 字・元直 真名・稲里

統率 5 武力 3 知力 5 政治 4 魅力 4

常に狐のお面を頭に着けている少女。

髪は桃色で、服装は水鏡女学院の制服、月英の軍師。

諸葛亮、鳳統と同じく水鏡女学院で学んでいたが、仕官先を探して劉表の元を訪れた際に月英と偶然出逢い、その時に何かを感じたらしく…そのまま月英に仕官する事に…今の武器は数打ちで無銘の剣。

## 第一回・オリキャラ紹介（後書き）

と言うことでオリキャラ紹介でした。

因みに作者の予定では、他にも数名オリキャラとして登場する予定ですので、合計で10人程は覚悟して読み進めてください。

## 第一話（前書き）

この小説は更新が不定期かつ、一話一話が短いことが多々あると思われます。

理由としては作者がその日の気分とノリで書いているからと言っ事に成りますが…。

と言う感じに成りますが…それでも読んでいただけると言う方はこのままお進みください。



## 第一話

時は後漢王朝末期……皇帝の権威が衰退し、欲に眼の眩んだ宦官、領主等による圧政、相次ぐ飢饉等の天災、盗賊による略奪……それらの被害に遭う力無き民……そんな平和とは言えない乱世の兆しが見えだした時代。

そして今、一つの村が賊により滅ぼされようとしていた。

そこは荊州北部に位置する人口1000人程の小さな村。賊に襲われればひとたまりもないであろうこの村には二人の英傑が居た。

一人は後に英雄をその知略で支える事になる軍師・徐庶……。

もう一人は後の世において『乱世の発明王』『発明の父』等と呼ばれる事となる英雄・黄月英。

これは一人の発明家が乱世を駆け抜ける物語。

「だつ旦那！ この村にもついに賊が……。ここ十数年襲われたことなんて無かったのに……って旦那あ、ちゃんと聞いてるんですかい？」

ここは荊州北部にある小さな村……。  
旦那こと俺の名前は黄月英こうげつえい。真名は夕ゆだ。コイツの名前は知らん……。と言つことでは今は村人A（仮）としておこつ。

「賊が出たんだろ？」

「へえ、そうなんでさあ」

さつき村人A（仮）が言ったように、この村はここ十数年間賊による被害はない。……らしい……。俺は良く知らん。

「はあ……。この村に到着するまでに掛かると思われる時間と賊の数は？」

「数は80〜100人、時間は四半刻程でさあ」

「100人か……。賊が現れたのどの方向だい？」

「北の方でさあ」

今、この村で戦えるのは多く見積もっても40人程だろう。それもほとんどの者が戦闘経験の無い民間人だ……。  
対する賊は多少の差はあれど戦闘経験のある者達がほとんど……。つまりこの戦力差を覆すには策を弄するか罫に嵌めるか……。それ

以外に撃退の方法は無いだろう。

因みに俺の強さは程々だとは思う。 無双出来るわけじゃないが、その辺の賊に遅れをとるほど柔な鍛え方はしてないからな。

「君は今から稲里…徐庶の所に向かって欲しい」

「あのお嬢ちゃんがどうしただ？」

「徐庶に賊の襲撃が有ることと、これから俺が足止めに向かう事を伝えて欲しい。 頼めるかい？」

「別に構わねえだが…なしてだ？」

「徐庶なら多分、今の状況で最善の対応をしてくれるだろうからね」

「分かっただ」

そう言っつて男は駆けていった。

「はあ…。 稲里が村の人集めて迎撃方法を考えて教え終わるまでの間くらいは足止め出来るといいんだけどねえ…ってことで、俺は賊の駆除も兼ねた足止めに行くてくるかねえ」

そう言っつて月英もまたこの部屋を後にした。

その手に己が武器を携えて…。

## 第一話（後書き）

と言う感じで第一話でした。 やっぱり短いですねえ。

誤字脱字等のご指摘有りましたら感想にお願いします。

## 第二話

「この辺で待つか…」

俺は今、村から北に2里程進んだ森の中に居る…。

時間的に賊はこの辺りに居ると思う…多分だが…。

今回の賊は100人…恐らく賊は、俺が居るこの森を通って村に向かってくるだろう…理由は至って単純…何故ならこの森の両脇には断崖絶壁…とまでは言えないが、切り立った崖があり、多人数での移動には的さない地形だからだ…にしても、100人の賊相手に改造してあるとは言っても元はただの弩と矢が40本…勝てる気が全くしないねえ。

まあ本来の目的は足止めな訳だし、何とか生きて帰れるとは思っただけだねえ。

「はあ…。俺一人でどこまで足止め出来るのかっ、ねえ」  
ヒュンッ

「っ…」

「なっ…」

先ずは一人…っってところかねえ。

「っ、野郎共ー！！あのヤローをぶっ殺せー！！」

「「「オオオー！！」「」」

「おおっ、怖い怖いっことで三十六計逃げるに如かずってねえ」

とは言っても実際は隠れて一人ずつ消してただけなんだけどねえ  
…。

っことで先ずは身を隠すとするかねえ。

…

月英が賊の足止めをしている時、村では徐庶を中心に着々と迎撃体制が整えられていた。

さすがに初めのうちは指揮を執るのが年若い少女と言うことで動きが悪かった村人達も、徐庶の的確な指示を聞くうちに段々と動きが良くなっていった。

「徐庶ちゃん、準備整ったよ」

「分かりました。皆さんは賊が来るまで持ち場で待機しててください」

「おう、任せとけ！」

私の名前は徐庶<sup>じょしよ</sup>、字は元直<sup>げんちく</sup>、真名は稲里<sup>いなづ</sup>。

私は今、主である夕様の命で村の人を指揮して迎撃の準備をしている…と言っかけていた。何故過去形なのかと言うと、つい今しがた迎撃体制が整ったからだ……。

装備として今回は、夕様が直々にお造りになられた連弩と言う連射性の高い弩が14、獵などの時に村で使われている弓が18、槍が17本で合計49人分の武器が使用可能になっている。よって若く力のあるものには槍や弓、その余りと力は落ちてしまっても賊などとの戦闘経験のある老人や女性には連弩を持ってもらった。

これによりこの村の兵……と言っても所詮は民兵だが……は合計49人となっている。

「皆！ 月英様がお戻りになられたぞ！」

声のした方を見ると、夕様がこちらに向かって歩いて見えた。  
ええ。

パツと見、怪我などは見えないようだが…。

「ご主人様、お怪我は有りませんか？」

「ああ、大丈夫だよ。」

それより迎撃の準備は整ってるかい？」



「はい。つい今しがた整いました」

「そっかあ、それじゃあこのまま指揮は任せるね」

「ご主人様はどちらへ？」

「矢を受け取ったら村の人に混じって北門の周辺で戦ってくるよ」

「分かりました。指揮は私にお任せください」

「ん。頼む」

そう言い残すと、ご主人様は矢を受け取って迎撃に向かっていった…。

...

村に帰って来ると、村の北門を中心に至るところで武器を手にした村人を目にした。どうやら迎撃の準備はほとんど整っているようだ。

そんな事を考えつつ、稲里の所まで歩いて居るとすぐに稲里が見えてきた。

稲里から現状を聞いたところ、迎撃準備は既に整っているとのこと

とだったので矢を受け取り、村の北門まで歩いてきた。

「月英の旦那あ、俺達あ助かるんですかい？」

北門まで来ると、頭が少し寂しい事になってる男が話しかけてきた。

「そんなの自分達次第だよ。どんなに優勢に戦えても諦めたら勝てる戦いも勝てないだろ？ だから今は勝てる気でないとダメだよ」

友情、努力、勝利な漫画雑誌に載ってた某バスケット漫画の監督さん曰く、諦めたらそこで試合終了らしいからねえ（笑）

そんな事を考えていると森の中から柄の悪い男達が雄叫びをあげながら走り出してきた。

### 第三話

「てめえ達あ、女以外はブツ殺せー！ 邪魔する奴あ容赦すんな  
！！ ガキだろおと年寄りだろうと関係ねえ！ 血祭りにあげるお  
ー！！！」

「「「オオオオオオオオ！！」「」」

この村の北に一里程進んだ辺りから広がる森、その中から雄叫び  
をあげて、賊共が駆け出して来た。数はざつと数えて4〜50人程。  
先頭を駆けているのは恐らく頭目だろう男。

「皆さん、一射目の準備を…発射は私の合図に合わせてください  
！」

「「「おおおおお！！」「」」

稲里の声が村に響き渡り、それに応える様に各所から声があがる。  
稲里の合図にタイミングを合わせて放つために自分も狙いを定め  
る…ターゲットは賊の頭と思しき男…。

「三、二、一、斉射！！」

合図と共に何本もの矢が賊に降り注ぐ…俺の放った矢は、狙い通りに男に命中し、その男の命を奪っていた。

「皆さん、二射目の準備を急いでください！ ……………三、二、一、斉射！！」

稲里の合図を受け、矢が賊に降り注ぐ…二度目の一斉射を受けた賊は、その数を20人程に減らしていた。

頭…多分だが…を失い、数をこんなに減らされても逃げ出さないうつて…こいつら極度の馬鹿か？ それとも何かしらの策でもあんのか？

そんな事を考えていると、賊が蜘蛛の子を散らすようにバラバラと別れ、退却を始めた。

その様を見ながら淡々と矢を放ち賊の数を減らしていると、賊が走り出してきた森から槍を手にした男達が数名飛び出し、賊を串刺しにしていく…。

それに呼応するかのように村からも、槍を手にした男達が賊の追撃に向かっていった…。

「ふう…ひとまずは完勝って所かねえ」

そう呟きながら賊が討ち取られていくのを見てみると、どうやら最後の一人が討ち取られた様で、最後の賊を討ち取った村人A(仮)

が、『勝鬨をあげよー!!』とか叫んでいるのが聞こえ、村の人間が一斉に鬨の声をあげた。

その様を見ながら、一人あたふたしている人物見つけたので、話し掛けてみる。

「そんなにあたふたしてどうした？」

「えっ？ ご主人様？」

「うん。 ご主人様」

「そうですが…はあ」

「で、どうしたんだい？」

「えっと…報告で、賊の数は100人程と聞いていたのですが…さっき出てきた賊って50人位でしたよね？」

「うん。 それくらいだったねえ」

「つまり賊は、あと50人残っている計算になるんです」

「……………」

そう言えば報告ん時に減らした賊の数、伝えるの忘れてた気が…  
……アハハハハ。

「その事なんだが、多分……」

「ご主人様？」

「その……報告の時に忘れたと言っか…報告した気になっていたと言っか…アハハハハ」

それを聞いていた稲里の額に青筋が…アレ？ めっちや笑顔だ…でもなんでだろ、満面の笑みの筈が恐怖を感じるんですが…ってか寒気がヤバイんですけど…。

「ふふ、ご主人様？」

「ハ、ハイ。 ナンデシヨウカ？」

アハハハハ…俺、明日生きてるかな…。 等と私にも思っていた時期がありました…なんて現実逃避をしていると、村人A（仮）達が帰って来たらしく、俺達の方に走って来るのが視界に入った。

「旦那あゝ」

今の状態から一刻も早く抜け出したい俺は、村人A達を使い話を変えるべく村人Aに向き直り話し掛けようとするが、それを察してか稲里からの説教が開始されてしまった。

因みに今回の襲撃による被害は、軽い怪我をした者がほんの数名  
ただけで死者及び重傷の者が出なかった様で、この日村では宴が  
催され、かなり盛り上がったらしい…。

何故『らしい』なのかと言うと、稲里の説教が夜が明けるまで続  
き、終わったときには既に宴も終わり、ほとんどの者が眠りについ  
ていると言う状態のせいだったりする。

## 第四話

「うう……み、水……」

俺は今、村人A（仮）の家に居る。念のために言っておくが、この家には重病人が居るわけではない。

「だ、旦那あ……どうか水を……水をお恵みくださいませ……」

俺が今ここに居るのは、昨日の戦闘で何気に活躍していたコイツ……稲里が言うには村の代表らしい……に、ちよっとした話しをしようと思ったからなのだが……昨晚の宴で飲み過ぎたらしく、今は二日酔いで話せる状態ではないようだ。

「はあ……自業自得だ……諦めて話だけでも聞いて」「うぶッ」……話しはまた後日、今日のところは失礼する」

「ちよ、旦那？ 帰るなら責めて水……うぶッ……」

後ろの方から何か聞こえた気がするが、今はスルーしたいなあ……吐瀉物にまみれるなんて、真っ平だし……ってことでス「ご主人？」



ルー……はさせてもらえないらしい。

「ヤダナア、冗談二決マツテルダロ？」

「では部屋から出ようとせず、大人しくこちらに来て話を再開してください……水は私が取ってきますから」

それって最近流行りの俺を生け贄に稲里召喚……もとい生還とかってやつかい？

なんて冗談は置いとくとして……話を戻そう。

「では、話を再開しますね？ この際前置きとかは面倒なので省きますが……明日にでもこの村を出ていこうと思います。その際この村に連弩を幾つか寄付しようと考えているんですが、受け取ってもらえますか？」

「うう……旦那の造った連弩なら幾ら置いていっても構わねえだよ」

「そうですね……では、話すべき事は話しましたのでこれにて」

俺はうめき声をBGMにしながら部屋を後にした。

稲里を待たないのかって？ あいつは先に帰ってるよ。何で分かるのかって？ だってあいつあの部屋にあった水差し持ってかなかったんだぜ？ 持つてくる気ゼロじゃん。

そんな訳で、俺もさっさと退散しないとねえ。

長居したんじゃ本当に吐瀉物まみれになりかねないからねえ

・  
・  
・

翌朝、俺達二人はこの村を発ち、旅を再開した。

旅の目的？ そんなの優秀な人材の勧誘と種蒔きに決まってるだろ？  
どんな種を蒔くのかって？ 今は秘密さ。

目的地？ 人材って言ったら許昌だろ？ 洛陽も棄てがたいけど  
な……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0293x/>

---

真・恋姫†無双 ～天より智を授けられし者～

2011年10月22日02時21分発行